

3.11 からの教訓は？

「原発ホワイトアウト」の予言

ホワイトアウトという言葉を知ったのは昨年発売された若杉 冽著の本からでした。2月は2度のホワイトアウトに見舞われ、我が家の庭の雪が解けたのは3月1日でした。その途端にクシャミに悩まされています。花粉が目に入りドライアイと重なって目を開けておくのが苦痛です。すると又今日（3月7日）は庭に数センチの雪が積もっています。3週間雪に囲まれた生活で白内障が併発しました。雪が冷たく恐ろしいものと本当に感じ雪国の苦闘が実感でき、ホワイトアウトはあり得ると雪の恐怖に慄きます。

第1回目の積雪にホワイトアウト

(1) 2月8日大雪警報を甘く見て、私は東京に向かいコンピューターの指導を受け、早く帰るように促され午後1時56分東京発のこだま号に乗り列車は定刻に発車はしました。各駅に列車が止まっており信号待ちばかりで小田原に到着したの午後4時でした。新幹線で小田原一東京間を2時間かけて戻ったのはあの東日本大震災の日以来でした。

(2) 更に悪いことに、海に近い小田原駅周辺に雪が積もっているのです。馴染みのタクシー会社に電話するも話中の信号音ばかり、経験を活かして駅の公衆電話からかけると繋がりましたが「手配は出来ないので取りあえず終点の大雄山まで行ってみてください。時間の約束はできないが優先手配はします」と言われ、定刻通りに運行している列車に乗り窓を見ていると激しい雪、積もる速さが目に見えるのです。

(3) タクシーは来てくれるだろうか。来てくれても我が家への道は大丈夫だろうか。心配しながら25分、顔馴染みの運転手さんが駅前に待っていてくれました。チェーンを装着して万全の体制で迎えてくれました。駅前で既に30cmは積もっています。

「いけますか？」 運転手さんは、「なんとか行きましよう、チェーンも付けてきました」と言って勇猛果敢に、北陸道で永平寺に向う気構えで出発、実は5年前、福井の友人が激しい雪の中を銀世界の永平寺に連れて行ってくれたことを思い出していました。

(4) ところがいつもの参道は通行止め、別の道は270度の急カーブ、スリップ間違いなし、第3の道は未知の道、やっと家に向う参道を飲酒運転のように曲がりくねりながら市道の終点迄無事に到着、この先は更に雪が深くなる狭い県道、昼でも暗いこの道がその日は輝いているのです。足跡ひとつない汚れなき純白の美しさ、我が家はここから400m、歩くつもりでしたが、運転手さんは、「歩きは無理です。死んじゃいますよという。行きましよう」と言ってアクセルをふかすと、キキッキと不気味な音と車輪の空回りのような音、運転手さんは諦めない。一段と力を入れてアクセルを踏む。車は白銀の上を滑るように走

り出す。時によろけて少しずつゆっくりと、止まったら最後立ち往生は私にも分かる。頑張っていると心の中で声援を送る。やっと県道が終わる。これから先、渡る橋からは私道、雪は更に深くなる。積雪は市道の2倍の高さになるのがいつものこと。箱根と変わらない。我が家はこの魔法のような橋を渡って100m歩きます。

「からここでターンして戻ってください。」「いや、それは無理ですよ。」同じ会話が繰り返される。狭い橋、スリップすれば川に落ちてしまいますが、勇敢な運転手さんの名ハンドル捌きで無事通過、その先はもっと高く積もっています。道なきところ、そう、「僕の前に道はない、僕の後ろに道はできる」ロマンチックな銀世界の我が家への到着、どこまでも親切な運転手さん、「ターンして玄関に横付けしますから降りないでください」我が家は右側にある。少し先の三叉路でいつもターンしています。

(5)その三叉路でバックに入ったところで後輪が雪に負けてしまいました。動かなくなったのです。妻を呼び出し3人で色々工夫するも埒が明かない、下の山本さんの応援を頼もうと思って歩き出したのですが3歩歩いた所でギブアップ、歩く意志はあっても前に進まないのです。大袈裟に言えば雪山登山のようなもの、アイゼンもピッケルもなく、吹雪、見る見る高くなる白い魔物、体が危険を察知して、戻り、3人で格闘すること1時間、やっと成功、万歳と叫びたいところでしたが、運転手さんは同じ道を、先程来降り止まない雪道を降りて行かねばならないと思うと心配がつります。

丁度、妻が翌日友人と旅に出るということで、そのタクシーに乗り我が家から下山することになって、運転手さんは空車にならなくてよかったのですが、命がけの運転が続きました。私たちは感謝あるのみでした。

小田原市に入ると我が家の前で起きていたことは誰にも信じられないように車は動いていました。

白さに負けて白内障

(6)さて問題は翌日に起きました。朝、玄関の雪掻きをしよと外に出ると昨日の問題の場所に又車が止まっているのです。誰もいません。どうやら新聞配達の方の車のようです。しばらくすると若い人たちがバイクで4人駆けつけて来ました。私も加わり脱出作業が始まります。昨日はタクシーの中型車、今日は軽自動車、4人で持ちあがりますから、直ぐに難なく事は済むと思ったのですが、昨日の経験も虚しく1時間が経過、山の中の騒ぎに気づいた山本さんが下から雪をかき分けて駆けつけてくれ4人を指導しましたら、僅か5分で脱出できました。頭の下がる思いでした。元消防士の山本さんはこの町内で私たちの命綱的な存在で、災害対策、人命救助の達人でいつもいつもお世話になっています。

(7)8時半から山本さんへ通じる道の雪掻きを始め終ったのは午後1時位で、なんと5時間も作業を続けたのです。途中何度も倒れそうになり、もう止めようもう止めようと思いつつも、山本さん夫妻の真剣な働きを見ていると止められず、頑張った次第です。

冷え切った体を温めるのにずいぶん時間が掛かりましたが、低めの温度の風呂に1時間つかり、横になって目が覚めたら深夜でした。久しぶりによく眠った感じで爽やかでした。ところが、目が眩しくて開けておられません。前に見えない部分ができて視界も悪くなってしまいました。

(8)11日からは博多の予定が入っていたので無理をせず体力を回復させサングラスをかけての旅となり、第2回目の雪は残った妻が悪戦苦闘、またしても山本さんの力を借りて、

陸の孤島化を防ぐことができました。私達4軒が住んでいる場所は市道―県道―私道となっていますので、市の救援活動は市道まで、県となると県庁から一番遠い場所にありますから期待は出来ません。覚悟して協力しあって日常生活をしています。備蓄も怠らず、買い物も声を掛け合って山を下っています。

博多では目が気になって周りの皆さんに迷惑をかけましたが、戻りまして白内障手術5000人、緑内障手術100人という名医を見つけて埼玉県新三郷の病院で診断を受けました。雪という言葉は冷たく怖い面もたくさんある。ホワイトアウトの意味を体験しました。

(9)ホワイトアウトの言葉を知ったのは、昨年9月発売された「原発ホワイトアウト」若杉冽著講談社です。319頁の本ですがホワイトアウトの語が出てくるのは290頁です。小説の内容から、この言葉が何を意味するか分かりませんでした。秘密保護法の通過させる方法も詳しく書かれたもので今も話題の本になっています。

最終章は爆弾低気圧、今回の2回の豪雪がもう少し日本海側に起こったことになっています。科学的な予見性に富む、私達が知るべきことを沢山書いてある本です。終章を一部引用して紹介します。まずジャーナリスト堀潤氏の書評から記します。

<http://bylines.news.yahoo.co.jp/horijun/20140205-00032349/>

小説は、一昨年12月に行われた衆議院選挙後のニッポンを舞台に、原発再稼働を虎視眈々と狙う電力業界、経済界、政界のトライアングルを克明に描いた内容になっている。犯人探しが行われるという事は、内部告発小説として、あまりに“真を食っていた”ということなのかもしれない。小説の中に出てくる人物の一部は、明らかに、実在する人物を連想する描き方になっている。

例えば、脱原発を訴える山本太郎参議院議員を思わせる人物は「山下次郎」。原発利権の存在についても指摘する等与党内で一匹狼として闘う自民党の河野太郎衆議院議員を連想させる人物は「山野一郎」。さらに、再稼働に向けた安全審査の申請を出したい東京電力に対して、事故が発生した場合の安全対策の不備を鋭く追求していた新潟県の泉田知事を思わせる人物は「新崎県、伊豆田知事」。

若杉氏は、なぜ自身の立場があやうくなるかもしれないリスクを背負ってまで内部告発小説を世に出そうと考えたのか？じっくりと聞いた。

堀：

どうして、自らの立場を危うくしながらも、小説を書こうと思ったのですか？

若杉：

2011年3月11日以降、我々は福島を経験をして国民全体も脱原発を望んでいる声が多いと思います。2度の国政選挙を経て、何事もなかったかのように政権も業界も原発を動かそうと動き出しています。年々、民意と離れてきてしまっているのではと感じています。その中で私が直接見聞きしている事実と間接的に見聞きしている事実、これを元に、いかに国民不在で再稼働を原発推進に向かった進んでいるのかをできるだけリアルに国民の方に伝えたかったのです。本当は、山崎豊子さん

のような小説家に書いてもらいたかったのですが、つてもなく知り合えずにいたので、自分で書く事にしました。以下省略。

本文は13章と最終章からなっています。最終章の一部を記します。

「原発ホワイトアウト」

若杉 冽著

講談社

終章 爆弾低気圧

年の瀬は典型的な冬型の気圧配置となった。爆弾低気圧とも言われる急激な天候の変化が日本列島を襲った。

12月28日の仕事納めから3日連続で激しい降雪が続き、日本海側の山沿いでは、一気に5メートル超の積雪となった。海沿いは積雪量が少ないと一般的にいわれるが平野部でも積雪は2メートル、海岸線沿いでも積雪は50センチメートルを超えた。

仕事納めが終わり、発電所の人員も最小限の体制となった。大晦日の31日、昼時は一時暖かくなり雪が雨に変わったが、夕方に再び冷え込みが厳しくなると、積雪の上に降った雨の水分が雪を凍らせていった。

新崎原発の高台にある、非常用電源車の車庫棟の入り口も、50センチメートルの積雪でうまり、夕刻からの激しい冷え込みで表面が硬化していた。**(今回、我が家でも50cmは越えています)**

普段であれば構内で除雪車を稼働させるところだが、正月休みなので、業者は帰ってしまっていた。発電所では東栄会に所属する地元業者と除雪車の稼働を契約しているのだが、当該事業者は正月に当たり体制を縮小させていた。この業者は幹線道路の除雪作業も地元自治体から受けていたため、新年を迎えるにあたり、原発の周辺の住民が無事に初詣に行けるよう幹線道路の除雪を優先していた。

それでも積雪は体制を縮小させた業者の除雪能力を超えていたため、新崎原発周辺の幹線道路は通行する自動車のスタッドレスタイヤにより、圧雪路面が磨き上げられ、鏡面のようにつるつるになっていた。

スパイクタイヤやチェーンをつけた車が一定程度走っていれば、路面はつるつるに鏡面化したりしないが、新崎県ではもうほとんどの車が冬にはスタッドレスタイヤを使用していた。

大晦日の夕方は交通量自体は多くなかったものの、年末年始を故郷や自宅で過ごすために慌ただしく移動する車が多く、路面の状況と相まって、幹線道路や高速道路も軒並みノロノロ運転となっていた。

新しく公表された規制基準は、テロ対策として、原発そのものを24時間武装した警官で警備することや、イザと言う場合には自衛隊が出動することなどが定められていたが、**原発の敷地外の対策に関しては一切決めていなかった。**

原発は膨大なエネルギーを発生させるので、作られた電気を送電線で送り出さなければ、エネルギーが蓄積されることになる。

仮に、送電線に支障を来し、発電した電気を送り出せないことになれば原発自体をスクラム(緊急停止)したとしても、外部電源か非常用電源かで冷却し続けられない限り、崩壊熱で炉心がメルトダウンする。

その送電塔は、電気事業法の定める施設基準に適合するように建てられていたが、送電線などの電線路の基準自体は1964年に法律が制定された時から大きな見直しはなされていない。特段の技術の進歩もないローテクの分野だからだ。(286-288p)

中略

民間施設としては考えられるすべての防備を施している新崎原発だが、そこから送り出される電気が通る送電塔は無防備にむき出しにされたまま大雪の中で寒々と立っていた。新崎原発で発電された電気は北新崎幹線と南新崎幹線と言う2系統の50万ボルトの高圧電線で、それぞれ約200機の鉄塔を介して関東電力のエリアに送られていた。(289p)

中略

吹雪は激しいホワイトアウトと呼ばれるような、大雪で視界が遮られ何も見えない状況だった。

中略

午後11時44分、NHKでは、「蛍の光」の合唱が「紅白歌合戦」で流れ始める頃だ。轟音が山中にこだました。雷にも似た火花が暗い山中を不連続的に切り裂いた。送電塔が爆破された。(292p) (なぜ爆破されたか?この小説の核心ですので省略。是非原本を)

「関東地方で大規模な停電が発生、原因は調査中」とのテロップがNHKの「ゆく年くる年」の放送の途中に流れたのは、新年を迎える数分前だった。停電が起きたのは関東地方の50万世帯だった。不意の停電に不吉な予感を覚えていたが、多くの人間はそのまま床についた。大抵の場合、大雪のせいによる停電なのだろう、くらいにしか受け止められていなかった。

翌、元旦の早朝6時から、官房長官の緊急記者会見が官邸で行われた。

「昨夜12時前、関東電力の高圧送電線の鉄塔が倒壊する事故があり新崎原発が緊急停止いたしました。現在原子炉を非常用電源で冷却中であります。周辺住民の方々は冷静に対応願います。この事態によりまして、関東電力の供給区域内で現在50万世帯に停電が起きておりますが、順次復旧する見込みであります」

緊張した面持ちで官房長官がこう述べる。

記者から次々と質問が浴びせられる。官房長官は蒼白な顔でそれでも丁寧に答えていく。

「放射能漏れはありますか」

「一切ございません」

「現在原子炉冷却できているのでしょうか」

「非常用電源が稼動中であります」

「非常用電源の燃料はどのくらい備蓄しているのでしょうか」

「所内に1週間分は確保しておりますが、念のため、タンクローリー車による輸送を、官邸から指示したところであります」

「鉄塔の倒壊の原因は何でしょうか」

「現在調査中です」

「停電の復旧にはどのくらいかかりますか」

「関東電力において、火力発電所の出力上昇を現在、行っておりまして、本日午前中には復旧できる見通し、との報告を受けております」

新崎原発では、午前7時の段階で、原子炉を冷却中のバッテリー電源の残量がほとんど無くなりかけていた。そのため非常用のディーゼル発動機を始動させようと、現場の当直の作業員が努力していた。

前日夕方からの冷え込みは非常に厳しく、気温は、氷点下9.5度に達していた。キンキンに冷え込んでいるためか、ディーゼルエンジンがかからない。――――
作業員はエンジンをかけようと焦る。ただ、原子炉についての知識はあるがディーゼルエンジンについての基礎知識は欠落していた。作業員にはディーゼルエンジンが始動しない理由が分かっていなかった。

新崎原発の所長は、正月休みを取って、東京へ帰省していた。作業員が昨夜から中央制御室に詰めている所長代理に無線電話で連絡を入れる。ディーゼルエンジンがかかりません社長代理が怒鳴る「そんなことがあるか、馬鹿野郎」

午前7時半にバッテリー電源が切れた後、原子炉の熱は急速に上昇し始めた。俄然中央制御室の緊張が原子炉の熱の上昇に比例してぐんぐんと上り詰めて行った。

所長代理は外部電源車の出動を命じた。外部電源車は福島事故の反省から原子炉のある海岸線から少し離れた高台の車庫棟の中に格納されていた。作業員が外に電源車の車庫棟に向かおうとするが、そこに行く道は50センチメートル以上の深い積雪に覆われていた吹雪も強まっていた。

「車では近づけません。」「馬鹿野郎歩いていけ」現場の作業員と所長代理の間でこんなやりとりが何度も交わされた。海岸線から海拔40メートルの高台にある車庫棟に歩いて近づくのは、雪山登山の様相を呈した。一旦シャーベット状になった積雪は、昨夜からの冷え込みで、カチンカチンに凍結している。アイゼンもピッケルもない状況で吹雪の中車庫棟車に登っていくのは、遭難の危険も感じられるほどだった。

「除雪車を呼べ。すぐにだ！」中央制御室の所長代理が必死の形相で施設課長に指示する。その施設課長は除雪業者に連絡を取ったが、業者の事務所の電話は通じなかった。しかも除雪業者の保有する除雪車は、この猛吹雪の中、幹線道路の除雪に全て出払っていた。発電所で除雪車の運転手の携帯電話番号を把握していない以上業者が捕まらない限りは連絡を取る事は不可能だった。施設課長は110番で警察に連絡をして除雪車を捕捉し新崎原発に向かうよう要請した。しかし警察の答えは、幹線道路でも雪による事故が達しておりそれどころではないと言う絶望的なものだった。

新崎原発の施設課長が除雪業者の連絡に腐心していた午前9時、官房長官の緊急記者会見が再度行われた。NHK正月番組を中断して放送する。官房長官から、「先ほど午前8時、原子力災害対策特別措置法に基づく原子力災害対策本部を、官邸に置いた。原子炉の冷却につきましては、バッテリー電源から非常用電源に切り替えに向けた作業を行っているところであります」との説明がなされた。

「現在原子炉の冷却は継続できているのでしょうか？」

「現時点では一時的に冷却が中断しております」官房長官の苦渋に満ちた表情を前に正月返上で官邸に詰めていた記者たちの間に、どよめきが起こる。

「冷却は何時再開できる見込みでしょうか？」

「それについての情報はまだありません」

「非常用ディーゼル発電機はなぜ作動していないのでしょうか？」

「現在調査中でありまして」

「発電所内にある外部電源車は使えないのでしょうか？」

「現在鋭意作業中でありまして」

「メルトダウンが始まっているということよろしいでしょうか？」

「いつ格納容器の外に放射能漏れが起きると予想されますか？」

「スピーディーでの予想はいつ公表されますか？」

「原子力緊急事態宣言ということご理解してよろしいでしょうか？」

矢継早に記者が質問を浴びせ掛ける。(294p-298p)

寝ぼけ眼で新春のテレビを見ていた新崎県民の間に、官邸の記者会見のテレビ中継によって衝撃が走った。原子炉の冷却ができていないことは、核燃料棒のメルトダウンが進行していることを意味する。――そのことは福島での3度のメルトダウンを経験した日本国民なら多かれ少なかれ誰でも理解することであった。新崎原発周辺の住民はなおさらである。

「おい餅焼いている場合じゃないぞ。メルトダウンだぞ」（住民が逃げ始める）

自宅に近い県道は雪があつたがなんとか走ることができた。しかし県道をわずか2キロ走ったあたりで、車は早くも渋滞に巻き込まれた。

新崎原発でメルトダウンが始まっていると思うと心臓がせり上がってきて、口から飛び出すような恐怖感を覚える。原発に向かう反対車線には全く車が通っていない。皆、原発から少しでも遠くに逃げようとしているのだ。

後方から1台のバイクが反対車線を平然と逆送し、国道の方へ走り抜けていった。後に子供を2人も載せた3人乗りだ。ヘルメットもかぶっていない。生きるか死ぬかの瀬戸際なのだ。つられるように、2、3台の軽自動車もバイクの後に飛び出して行く。その直後、一斉に他の自動車も反対車線を走り始め、一気に車列は前進した。今は、交通法規にこだわっている場合では無い。

そのまま国道に着くと県道から来た車の列はそのままの勢いで国道の反対車線を逆送して突っ込んでいった。反対車線を走る車が急ブレーキをかけスリップを起し、そのまま逆送した車に激突する。つるつるに表面化した路面ではスタッドレスタイヤはほとんど制動力を発揮しない。両方向から次々と後続の車が衝突していった。衝突を避けようとしてハンドルを取られた車が、高速につながる車線に突っ込んだ。運悪く衝突された車のガソリンタンクに着火し炎上する。その後では次々と玉突き衝突が起きていく。(300p)

新崎原発は完全に陸の孤島となった。

新崎原発では再稼働した6号基、7号基の両方で、核燃料棒のメルトダウンが進行していた。原子力規制上のシュミレーションでは、電源喪失から1時間後に炉心露出し、メルトダウンが始まり、3時間後にはメルトスルーして圧力容器を破壊、その後、格納容器内でのコンクリートと溶け落ちた核燃料とが反応して大量の水素と一酸化炭素が発生し、7時間後に格納容器破壊、20時間後に建屋の基礎貫通、そして大量の放射能性物質が外部に放出されると予測されていた。(306p) 中略

1月2日、海外の市場が荒れ狂っている頃、北京では中国政府の報道官が、日本の新崎原発の事故に深い憂慮を示すとともに、在日中国人保護及び日本国民への人道支援のため、中国軍を派遣する用意があると発表した。(316p)

2日になっても日本海側に発達した爆弾低気圧とそれのもたらす寒波と大雪は止むことがなかった。外部電源車の海からの輸送を自衛隊に要請したが荒れ狂う日本海が頑強にそれを拒んでいた。政府、関東電力事項対策統合本部に昨夜から徹夜でつめている総理にとって、それは天罰のようにも思えた。そしてそれは福島の警告に耳を貸さなかった日本人に対する天罰でもあった。天からの罰である以上それはただ終わるまで甘んじて受け入れるしかなかった。(316p-317p)

福島の悲劇に懲りなかった日本人は今回の新崎原発事故でも、それが自分の日常生活に降りかからない限りは、また忘れる。喉元過ぎれば熱さ忘れる。日本人の宿命であった歴史は繰り返される。しかし2度目は喜劇として。そしてその悪魔のシステムとともに日本には原発をメルトダウンに至らせる1,000本以上の送電塔が無防備のまま残されるのだ。(318p-319p)

(注) 送電塔が倒れた事故は1998年2月21日、香川県坂出で起きています。原因は四国電力によると「ボルトが外れたのが原因」になっている。倒れて鉄塔は1971年に完成。耐用年数は50年、最大40mの風に耐えられる設計になっているという。事故当時の風速は3-5mだった。昨今の天候では40-50mの風速は日常茶飯事になっている。

3.11 は歴史に刻印すべきこと

原子力発電を実用化した当時の科学者は、核廃棄物の処理の危険性については熟知しており、科学の進歩により2010年代には安全に処理できる技術が確立していることを前提に建設を始めました。技術水準の高い日本で起きた3.11原発事故はチェルノブイリの事故以上に世界に震撼を起し今も注目されている国際的な事件です。しかし、風化現象が国内で始まっています。

(1) 福島県民の77%のひとが原発事故に風化を感じるとしています。

汚染水処理問題の対応について83%-90%の人が評価していません。

(2) 原発に関する政府の方針は 再稼働 新しい原発を造る 海外に輸出する。

海外に輸出するについては驚くべきことに、輸入国で発生する核廃棄物を日本が引き取るということをセールスポイントにしているそうです。どこまでも経済優先です。

(3) 核廃棄物を国内で処理することが難しいと判断した場合考えられることは後進国への強制持ち込みです。政権の動きが海外から批判を受けるようになってきましたが、日本への脅威が感じられるのかも知れません。

原発推進—プルトニウム保有量の増加—潜在的核兵器保有—憲法改正—
世界戦争に参加—核廃棄物の処理受入植地?

既に準備は特定秘密保護法、非核三原則の見直し、武器の共同開発等に見ることができます。

(4) 原発問題に熱心に取り組んでいるのは朝日新聞で「プロメテウスの罫」は855回を越え、現在は「内部告発者」シリーズが連載中です。

(5) 国民にとって最後の砦は憲法改正です。憲法は為政者が国民に横暴を働かないように守る為にあります。憲法を作るのは国民です。国民ですが間接民主主義の日本では選挙で選ばれた議員の集まりである国会です。その国会で多数決で決まりますから、今は何でもありの独裁体制です。それに歯止めをかけるのが国民投票です。

(6) 憲法改正を阻止するのは 国民投票と 世界の世論だと考えます。

国民は憲法を賢く学ばねばならない時を迎えています。